

# 拳魔邪神でダンまち転生

かるあ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダンまちの神々にフワツとした不満を抱えていた主人公はなぜか拳魔邪神となってダンまち世界の古代に転生していた。

「人間の力はすごいんだぞ！ファルナなんか必要ない！」というある意味で人間賛歌な物語です。

※特定キャラ、特に神々に対する強めなアンチが入ります。

目次

第4話  
第3話  
第2話  
第1話

10 7 4 1

## 第1話

「おうそこの白い坊、このオラリオでなんぞ珍しかったり美味しい果物はあるかいのう?」

豊穰の女主人で昼食を済ませて街をブラついてたら、木彫りの不気味な仮面を被った男の人が声をかけてきた。

「えっ、ぼ、僕ですか!」

うーん…僕もオラリオに来たばかりなのでわからないです…

あつ、街の方に行けば果物とか野菜がひとまとめに売ってるお店があるので行けば何とかなるかもしれないよ!」

「カカカツそうかえ、それならそっちに行こうかいのう。世話になったわいのう。」

「いえいえ!…行っちゃった…なんだか不思議な人だったな。神様みたいな…もしかして神様だったのかな?」

「クラネルさんどうしたんですか?」

「あつリユーさん!今木のお面を被った不思議な人に果物について聞かれたから売ってるお店を教えたところなんです。もしかしたら神様だったのかなーって」

「待て、クラネルさん。それは不思議というより変な人ではないのか? 格好は? 場合によってはガネーシャファミアリアに通報を…」

「え? 違うと思います! ああ、オラリオでたまに見る武術家の人たちと同じかような服装でしたし!」

「武人達と?? 神、お面…果物…まさか!!!」

「クラネルさん…もしかしたらその人は拳魔邪神かもしれません…」

えっ拳魔邪神ってなんか聞いたことあるかも。

リユーさんの顔色もだんだん険しくなっている。

「拳魔邪神ってどんな神様なんですか?」

「拳魔邪神、古代から生きる武術のみで人間から神にまで成り上がった埒外の化け物。」

人を殺し神を殺し、オラリオ外にいた多くのモンスター達を殺し、隻眼の黒竜をも単身で殺した闇の英雄。

彼はファルナを持たずして肉体と武術のみでその全てを成してきた。彼の弟子である武人たちもまたファルナを持つていない。なにファルナを授かり日々ダンジョンに潜る冒険者達よりも強い！

冒険者や神の中では彼らはタブーになっているくらいだ…」

うわ、とんでもない人なんだ…

凄いなあ、僕が英雄になるなんて気が遠くなりそうだよ…なれるかなあ…

そうだ！それなら…

「その、例えばですけど、彼のファミリアというか、道場？に弟子入りとかは…」

ヒツさつきとは比じゃないくらいリユースさんの顔がおっかない…

「クラネルさん、それだけは絶対にやめた方がいい。いや、してはいけない。

かの団体、いや武人達は強い。当然神々の多くは彼らをファミリアに入れようとした。しかし彼らは全力で抵抗した。その果てにファミリアを潰し神殺しまで成した。運良くというか悪くというか無理やりファルナを刻むことに成功した事例はあつたらしいが、その武人はファルナで強くなることはなかった。なぜなら、彼ら武人達の常軌を逸した修行は人間の肉体を、精神を、魂を、在り方を、可能性を鍛え昇華させるものだからだ。

彼らは神のファルナを必要とせずにレベルアップを成していた。

そして、彼らは神を神と思っていないし、武人にファルナを刻んだ神を殺すことが彼らの中では当たり前なんだ。」

絶句した…

「そ…それは…」

「拳魔邪神がとうとうオラリオに来たということが本当なら、これからオラリオは荒れそうだ…」

「カカカツ！なんぞ、美味しい果物が多くてオラリオは良いわいのう！  
もっと早く来れば良かったわい！」

のう、そう思わんかいのう??…冒険者と神を憎んでそうな小人族  
の女盗人よ?」

## 第2話

その男はとある世界で武術のみで一国の神にまで登りつめた。

その男は世界有数の武術家であり、老人ながら見た目は青年だった。

振る舞いは天上天下唯我独尊、しかし神として崇められるだけのカリスマと人心掌握術、人智を超えたような武力を持っていた。

彼はシルクアッド・ジュナザード

拳魔邪神と恐れられたパンチャック・シラットの闇の武人である。

という彼の記憶と経験、魂、武術、身体スペックをなぜか受け継いだハーメルン2次小説ROM専才タクな元一般男性です。こんにちはだね！

最近は特にダンまち2次小説にハマっててよく読んでただけど、まあ神に関してモヤモヤしてたんだよね、某ネットのあの人に「それってあなたの感想ですよね(^^)」とか煽られそうだけど(○

まあそんな日々を送ってた時に持病が悪化してポツクリ死んじやったわけよ。

んで、だ。たぶん今転生したんだろうけど、その中になーぜーか「史上最強の弟子ケンイチ」に出てくる一影九拳な拳魔邪神のアレコレを受け継いでることに気づいちゃったんだよね。

ぶっちゃけめっちゃ嬉しいですよやったね!!!!

作品自体も好きだけど、神とまで崇められるっていうスケールのデカさとか振る舞いとかドツボですよ。

さすがにマルつと受け継ぐわけだし、価値観や精神性とかもぶっ飛んだけどね!!

でも問題ない。  
なぜって？

…  
ここダンまち世界の古代だからね（白目）

なんでか知らないけど、そういう知識があるとすよ。フシギだね

…  
さて、

今世にて決めたことがある。

原作邪神そのまままではいかないけど、芯のある生き方をしたい。

彼はそりやもう好き勝手やった。でもそれ自体が彼の芯だ。己の力を己の好きなように使って何が悪い。在り方が邪悪と言われようと所詮はこの世は弱肉強食。テイダードがああなった経緯も大国の脅威に抗った結果にすぎん。そこで力を示し、国民が我を崇めたならば、我がルールになる。嫌なら力を持って抗えば良い。

負けるつもりは無いがな。

我は好きに生きるぞ。

と、言う感じに生きるし、口調が軽いと雰囲気出ないから、口調とか振る舞いは原作に踏襲します!!

まずは肉体性能と技の確認、それから鍛えなければ。

幸いにして、梁山泊の大まかな鍛え方の方針を原作知識で持つてるし、それに加えての邪神ボディと経験と知識だ。

あの闘いの記憶の中には彼が見てきた梁山泊を含めた世界中の武術の技についてのものもある。



そこからエッセンスを取り出して我がシラットに取り込もう。

後の神時代におけるファルナなんぞ必要ない。

そういう生き方を、私の生き方で否定してやろう。

自らが鍛え上げた技と身体のみで闘い生き残る武人達を多く作り、ファルナに頼りきった冒険者達の劣等感を煽ろう。

ナチュラルに人間を見下している神共を、「人間と似てるだけの別種の生き物」として認識させてやろう。

そのためには神共や隻眼の黒龍とやらを一方的に黷れるくらいには鍛えねばならないわいのう。

永年益寿法と、櫛灘美雲の不老長寿の術も使っておかねば。

カカカツ！やることが一杯あるわいのう！

### 第3話

老化を止め、修行を進めていくうちに肉体、精神、魂の在り方、器が強化されていくのを感じた。記憶の世界よりも、この世界では鍛えた時の効果の上昇率は大きいようだ。

「なんぞ、やっぱり神の恩恵なんぞ必要ないではないか。カカカツ！」  
そろそろ相手が欲しくなってきた。

世界を見て回るか。

こうして世界中を旅した。

のんびり歩き、海底を泳ぎ、海の上を走り、木々を飛び回り、とにかく動き続けた。

こうしているうちに多くの人や神、怪物たちを観察していて気がついたことがある。

「カカカツ！ 思った通りじゃわいのう。大きな出来事が起きた時は大体が神が原因じゃわいのう。怪物が生まれるのも、直接的にしろ間接的にしろやっぱり神が関わっている。こりや、後のオラリオのダンジョンの誕生も……」

「おい！ その地を這う人間！ 奇妙な面をしおって…不躰に見てくるその無礼な目線、神に対する不敬なり!!! 殺s…《第一のジュールス》ブア…」

「人も神も、変わらんわいのう…」

「というか神は天界とやらにいないのではないのか？」

「まだ地上世界と天界が別れてない時代が今なのかもしれんわいのう…」  
「ということは、だ。」

「この混沌の世界から神共が肉体を捨て去り天界とやらに引越す時が来るというわけか？」

「その術を身につけて、いつでも天界に行けるようにすれば後の神を追って死合に行けるわけだわいのう!!!」

それに最近我に集まってきた、気とは違うこの祈りや畏れ、念のよ  
うな”何か”、信仰心か神力というやつか？

これで自らの全てを置き換えた存在が神という生き物か!!なんと  
詰まらない生き物だわいのう!!いつそ憐れだ!カカカツ!」

肉の器は必要だ。これあってこそその武術だよね!

この気持ちを軸に持つておけば、つまらん生き物に変化したりはし  
ないだろう。

この世界でも拳魔邪神と言われたのは嬉しい。ただ笑えるの  
は神共もそう認識しだしたことだ。奴らは余りにも期待ハズレでイ  
ライラするが、神に関しては醜態を記録しといて未来で洗いざらいぶ  
ちまけて信用とやらを吹き飛ばしてその様を肴に酒でも飲むことで  
収めよう。

我の、いや俺の、武人の生き方は言うなれば弱肉強食と人間賛歌だ。  
俺は!人間は!ここまで強いんだぞ!お前には負けねえ!って自らの  
肉体と技で証明するものだ。

そこに神によるファルナという不純物は要らない。

武とは人間のものだ。人間が見出し、練り上げて繋いできたもの  
だ。

であれば、我が拳魔邪神の名を残し、ファルナを必要としない武人  
達を増やしていけば人間の地位や力、矜持は自ずと上がる…はずだ。  
知らんけど。

という方針でいこう!!!

いつかは冒険者じゃないオラリオの住民たちを門下に入れて、やた  
らと強い子供やおぼちゃん達を量産したいね!!

なんなら宗教っぽくしてもいいかも!少○寺的なノリで(笑)

でも強いと分かれば無理やり眷属にしようとするかもな。

でもまあその時は…

「簡単だ、殺せばいいわいのう」

未来の弟子たちには簡易神殺し（天界送還）くらいはしてもらわんと。

もちろん俺は神殺し（真）です（ニッコリ）

というかあの穴、捨てるのに便利だからだと言って神どもが怪物たちや人間たちの骸を捨ててゴミ捨て場扱いしてるんだが、大丈夫か？

なんか負の念っぽいのがやたらと立ち込めてるぞ…

や、まさか…ねえ？

## 第4話

転生してから何千年もたった。

やりやがった。やらかしやがったよ。

事件は神どもの天界引越しの時に起きた。

神どもが天界に行く際に潔癖症を発揮してその身の神力以外のすべてを例の負の大穴に捨てていきやがった！それも神全員だ！！

大穴がどんどん変化していくのに、お引越しに目をキラキラさせてやがる神どもは気づいてもいねえ。

なるほどな、こうやって怪物もといモンスターは生まれて大穴は後のダンジョンになるわけだな。

まあ、別にいいか。こっちは奴らの弱みを握れた上に戦う相手も増えたわけだ。

そろそろ最後の神が天界に行くころか…そこそこ強そうだし、つまみ食いするか。

「カカツ」

天界に向かう最後の神である闘神リラの番になったときに “それは聞こえた。”

闘神としての勘か、かろうじて反応し避けることができたその攻撃は深く地を割った。

「なんだ!？」

そいつは面妖な木の面をかぶった男だった。

拳魔邪神だ。確か名はシルクアツド・ジュナザード。

噂で聞いたことがある。矮小な人間の身で怪物や神を多く殺し、あまりの強さから信仰を得て神力まで宿した埒外の化け物。不遜にも神の名を冠し、神格を得られるのになぜか肉の身にこだわり続ける理解不能な人間。

「なに、しばらく神どもが地上から消えるらしいから我から引越し祝いを、と思つてのう。なにせ闘いの神だ！闘うのは好きじやろう？まあ、お前との死合いは面白くなさそうだがのう。」

「きさ、ま！上等だ！肉の身に、人間の器にこだわり続けた貴様に神と  
いうものを教えて殺しつくしてやる！それをもつて私への引越し  
祝いだ！千人殺しの槍いいいい！」

「カカカツ！」

《転げ回る幽鬼（ハントウ・グルンドウン・プリンイス）》

「アツ…ガツ…」

今私は何度殺された？

今も死に続けている。まずい、存在を構成していた神力が尽きる…

逃げれん…

「なんともつまらん相手だわいのう。まだ早かったか。もう数千年  
待って力をため込んだ神どもに期待するしかないわいのう。それま  
ではモンスターと英雄どもで遊ぶかいのう。」

どこかで腰を落ち着かせて武人を育てるのもいいかもな。



やっと国の運営を引き継がせたし、修行方法も弟子たちの中である程度確立された。

ぼちぼち達人クラスも生まれだしたことだ。俺自ら動くことはこれまでよりは減るだろう。

いい加減そろそろ神力をどうにかしなきゃなあ。

今のところ神力は全身の細胞を進化させ強化するのにはしか使っていない。もつと面白い使い方はないかな？とりあえずお面の強化だけしとくか。割れて素顔がでるのもロマンあつていいとは思うけど簡単には割れてほしくはない。

他には、うーん思いつかん！いったんは静動轟一のノリで体内に纏め固めておくか。こうすれば神力貯金しやすいし。気と混ぜて使いやすい。間違つても種族「神」にはならないように…

ん？なんかこれ神力とは別のものになってないか??

ほほう、これなら肉体を捨てずに済むし、種族「神」にはならないし、人間のままでいることができる。

この力、とりあえずはチャクラと呼ぶか。チャクラでもって全身の細胞を進化させよう。

ワクワクするわいのう！カカカカツ!!

そうしてマーシャルアマゾニアのいる国ティダードの君主、兼シラット開祖の拳魔邪神シルクアッド・ジュナザードは人間の身を維持したままにして更なる力を手にした。

肉体の進化に必要な分以外のチャクラを八つの塊に圧縮して漏れないように封印し、一つずつ開放していくことで肉体強化をする技、パくら：オマーージュ技の八門遁甲である。

チャクラの制御に有用な点に加えて、近頃インフレ気味だった力を大きく制限することで更なる修行になるという一石二鳥なお得な技である。